

術前患者の不安について考える

—術後患者への質問紙調査を通して—

12階西 石田 有希子
外科外来 恵 光代

I はじめに

近年医学の進歩に伴い、術式も多種多様となり、手術を受ける人の年齢層も多岐に渡り、高齢者も増えてきている。手術は疾患そのものの治療を第一目的としたものであるが、患者にとっては痛みや生命への危惧、ボディイメージの変化や生活変化など多大な苦痛をもたらすものである。周知の通り、術前の患者は手術の大小に関わらず、さまざまな不安を抱えている。

そこで、私達が臨床で関わっている患者は実際、手術に対してどのような不安を抱えているのかを明らかにし、理解したいと考えた。

今回、患者への質問紙調査により、現状の術前オリエンテーションを随時振り返り、今後の手術を受ける患者の持つ不安の理解・軽減につなげるための示唆を得ることができた。さらに、術前患者と関わる上での姿勢について、改めて認識できたので、ここに報告する。

II 研究方法

1. 調査対象

肺の手術を受けた術後5～7日の経過順調な患者17名（男性9名、女性8名、肺葉切除術14名、胸腔鏡下肺部分切除術3名）

2. 調査期間

平成11年7月15日～平成11年10月10日

3. 調査方法

上記対象に、無記名での質問紙調査を実施
質問紙内容については資料参照
回収率100%

III 結果

アンケート集計結果参照

IV 考察

調査前、手術を受ける患者は皆、程度の差はあれ当然不安を持っていると予測していた。ところが結果は、不安がないと答えた人が半数であった。これは対象が

60歳～80歳代の高齢者が70%を占めたからではないだろうか。「医者様は神様」という言葉からも分かるように、医師へ全面依存する人や、不安は他人に言うものではない、自分で解決するものだという日本人特有の我慢の美德のような考えが対象の背景にあることも影響していると考えられる。

医師の説明及び看護婦の術前オリエンテーションを受けた後の不安の変化を見ると、「一応軽減した」「少し軽減した」が約70%を占め、不安の軽減につながっているようだ。しかし、術後の経過はあまり想像がつかないと答えた人も半数近くを占めている。ロングは「未知なるものへの不安は、何が行われるのかを知ることによって、ある程度取り除くことができる」⁹⁾と述べている。このことから、術後の経過を想像できない人が大半であるということは、それに伴い不安を抱えている人が、実際は多数いるのではないだろうか。

次に、患者はどのようなことに不安を抱いているのかを見ると、痛みに対するものが多くなっている。手術は身体の切開を伴う治療であり、切るということは容易に痛みが予測され、不安の大きさにつながったのだろう。術前に知っておきたかったことでも「患者が受けねばならない痛みや苦しみはどのようなものか」と挙げられており、痛みに対する患者の不安の強さが感じられる。現在当病棟では、既製のパンフレット「手術を受ける患者の皆様へ」を用いてオリエンテーションを行っているが、記載のない痛みに関しては、一貫した説明がなされていないことが影響していると推測される。

また、不安なこととして多く挙げられていたのは、肺炎や出血などの「合併症」の恐怖に加えて「手術後息苦しくならないか」であった。肺を切除するということは「呼吸できない＝死」と受け取りやすく、死んでしまうかもしれないという不安を抱かせる。このような肺切除患者特有の不安への配慮も必要になってくる。

「手術にかかる時間」についてもまた、多く挙げられていた。パンフレットには手術開始時間の記入欄は

あるが、所要時間については記載がなく、おおよその時間も想像できない患者にとっては不安となり得る。だが、術前オリエンテーション時には優先順位が低いのか、見落とされがちな項目であるようだ。手術時間の長さは患者にとって、手術の大きさや、生命への危険度を測る尺度となっており、手術時間の説明も大切である。

私達は、術後に装着されるライン類や傷についてなど術直後に関する不安がかなり多いのだろうと予測していた。その予測に反して多かったのは、「体調（体力）はどれくらいまで元に戻るのか」「手術以外にどんな治療をするのか」などの、手術直後のことではなく、今後の生活に関連した不安であった。また、術前に知っておきたかったことの中にも、「再発のおそれがあるか」が挙げられており、見通しのつかない将来に対しての不安がうかがえる。

看護婦は術前オリエンテーションにおいては主に、術後合併症予防・早期離床に重点をおいた説明・指導を行っている。しかし患者は、疾患そのものに対する不安をはじめとして、手術を受けることによりさらに、ボディイメージや自己価値への影響、社会生活変化など、あらゆる苦痛を余儀なくされる。手術は患者にとって、将来に対する多大な不安をもたらすものである。そして患者は、患者である前に、家族を持ち、自分の人生を生きる社会生活者（人間）なのである。手術は患者にとって闘病における第一段階、患者の人生における一つの通過点にしかすぎない。患者自身が、手術後の将来への見通しがつかない状態で術前指導を行っても、患者の手術に対する意欲を十分に引き出すことはできないだろう。そこで、看護婦は、患者自身が将来の方向づけができるように援助していくことが必要である。

このように種々の不安を抱えている患者に対し、患者と関わることの多い医療者である医師や看護婦は、どれだけ向き合うことができているのだろうか。医師や看護婦に疑問や不安を相談しやすいかの問いに対して「相談しやすい」と答えている人が82%と多く、実際に医師や看護婦に相談している。しかし「相談しづらい」と答えた人の、その理由を見てみると「忙しそうでとりつく間がない」「聞いたことに分かりやすい答えが返ってこない」などが挙げられている。医療者に対する要望の中でも「人と人としての交流、信頼と愛を深めて欲しい」とある。このように、医療者の言葉や態度が与える患者への影響力は測り知れないほ

ど大きい。そのことを認識し、自覚を持って援助していく必要がある。

V まとめ

1. 術前の説明の後も不安を持っている人は多い。
2. 痛みや合併症など術直後に対する不安と同様に、今後の社会生活に関連した不安が多かった。
3. 看護婦は、患者自身が将来の方向づけができるような援助をしていく必要がある。
4. 医療者の言葉や態度が患者に与える影響は大きい。
5. 患者を理解しようという姿勢をもって信頼関係を深め、不安の理解に努めることが大切である。

VI おわりに

今回の研究においては、対象が少なく術前患者の不安の理解につなげるには限界があり、不安に対しての具体的な援助を見出すまでには至らなかった。今後は、本研究をもとに術前患者の持つ不安の理解に努め、看護の向上に生かしていきたい。

最後に研究を進めていくにあたり、御協力してくださいました患者の皆様へ感謝いたします。

VI 引用・参考文献

- 1) 宮崎和子：看護観察のキーポイント 一般外科中央法規出版 1995
- 2) 坂本恵ほか：肺切除を受ける患者の不安への援助 月刊ナーシング vol.14 no.6 1994.5
- 3) 濱崎文子ほか：手術を受ける患者の精神的不安度 臨床看護 第22巻 第12号 1996.11
- 4) 加藤治文：肺がん時代 講談社 1995
- 5) バーバラ・C. ロングほか：外傷・外科的看護 新臨床看護学大系 臨床看護学工 398-453 医学書院 1983
- 6) 曾田信子：手術を受ける高齢者のアセスメント 看護技術 vol.43 no.11 1997-1998
- 7) 川島みどり：外科系実践の看護マニュアル 看護の科学社 1996
- 8) 青木照明：系統看護学講座 臨床外科看護総論 医学書院 1995

1. 手術が決まったとき不安はあったか
はい いいえ
2. 医師や看護婦からの説明を受けた後も不安はあったか
はい いいえ
説明を受けた後不安は軽減されたのか
一応軽減した 少し軽減した あまり変わらない
もっと不安になった その他
3. 手術後の経過は想像できたか
はい いいえ
4. 手術前に持っていた不安や心配なことは何か（以下より5つ選択）
 - ・手術にかかる時間について
 - ・いつ、麻酔から醒めるのか
 - ・傷はどれくらいで治るのか
 - ・傷の大きさはどれくらいか
 - ・抜糸はいつ頃か
 - ・食事はいつから始まるのか
 - ・いつから歩ける（動ける）のか
 - ・痛みはどれくらいか
 - ・手術後、息苦しくならないか
 - ・どんな管が手術後つくのか、いつ頃取れるのか
 - ・合併症（肺炎・輸血）になったりしないか
 - ・退院はいつ頃できるのか
 - ・今後、手術以外にどんな治療をするのか
 - ・仕事復帰はいつ頃できるのか
 - ・体調（体力）はどのくらいまで元に戻るのか
5. 疑問や不安を誰かに相談したか（複数回答可）
医師 看護婦 他患者 家族 知人・友人 しない（できない）
6. 医療者に、疑問や不安を相談しやすいか
医師・看護婦ともに相談しやすい
医師・看護婦ともに相談しづらい
7. 手術前の説明で知っておきたかったことは何か（自由記入）
8. 今後の医療者への要望（自由記入）

〈アンケート集計結果〉

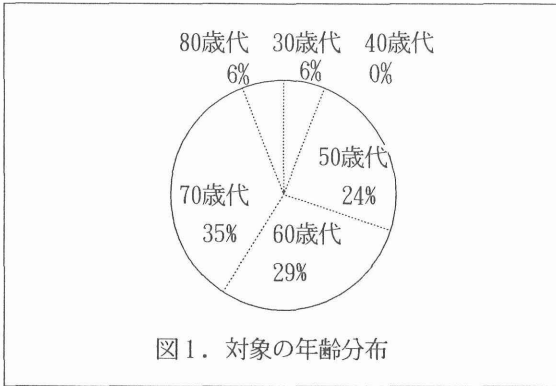


図1. 対象の年齢分布

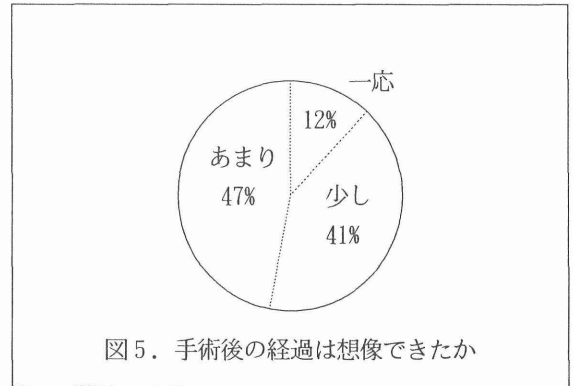


図5. 手術後の経過は想像できたか

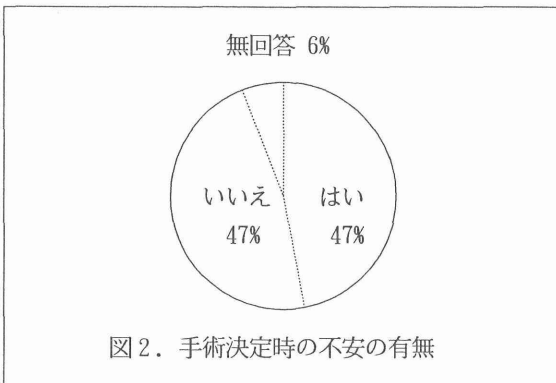


図2. 手術決定時の不安の有無

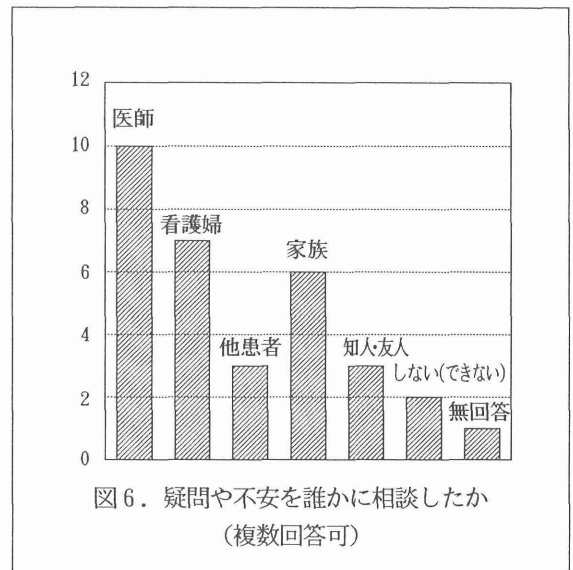


図6. 疑問や不安を誰かに相談したか (複数回答可)

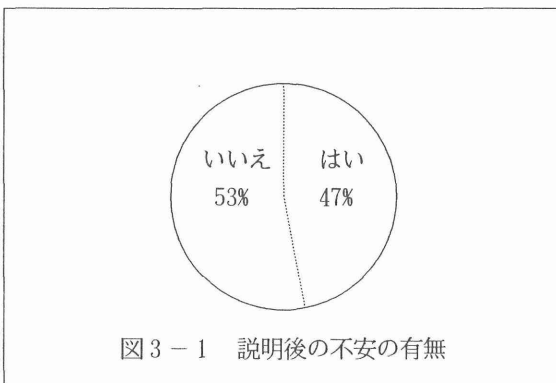


図3-1 説明後の不安の有無

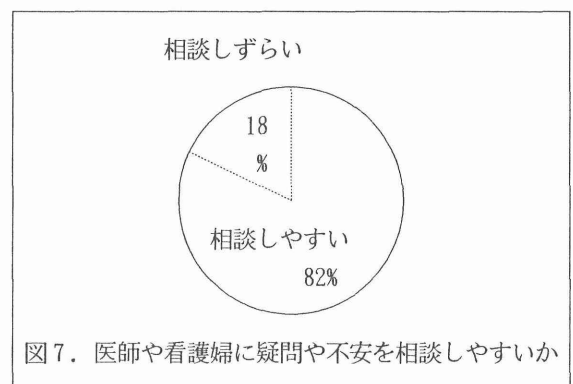


図7. 医師や看護師に疑問や不安を相談しやすいか

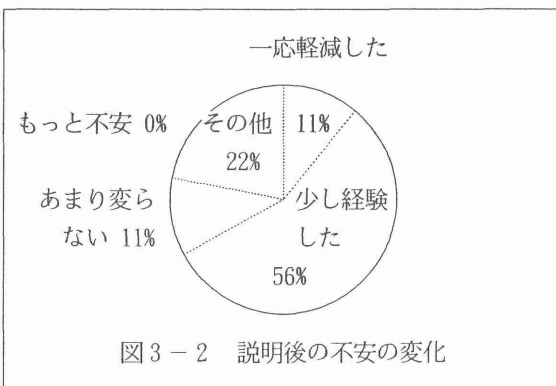


図3-2 説明後の不安の変化

相談しづらい理由

- ・忙しそうでとりつく間がない
- ・なんの質問に対しても「誰でもそうです」と言われ安心感がない
- ・聞いたことに分かりよい返事が返ってこない
- ・素人のため、細かく相談しては失礼・無駄と思った

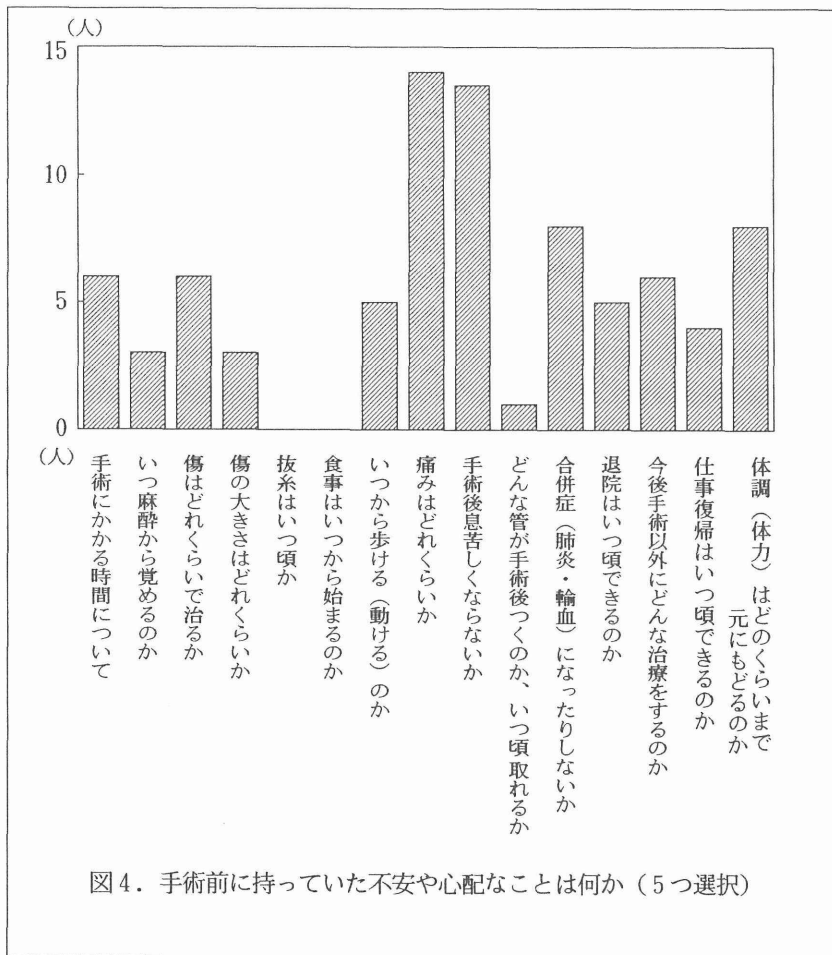


図4. 手術前に持っていた不安や心配なことは何か (5つ選択)

手術前の説明で知っておきたかったことは何か (自由記入)

- ・再発の恐れがあるか
- ・病気はどの程度進んでいたのか
- ・専門用語を使って説明されても写し書きするのみ
本当に知りたいのは、患者が受けねばならない痛みや苦しみには、どういふものがあるか
- ・術後のリハビリ、回復期のおおまかな目安 (何日目くらいから軽い運動をしたらよいか)
- ・予期せぬ事が起こった場合の家族への対応

今後の医療者への要望

- ・お医者様は神様と同じ。先生の一言によって苦しみ、痛みは半減する
- ・とても気が弱っているため、優しい言葉は何倍も嬉しい
- ・大丈夫と言って肩に手を置いてくれるだけで幸せ
- ・人間と人間としての交流を、信頼と愛を深めていく
- ・できるだけ予定を早く患者に教える工夫
- ・麻酔から覚めてから状態を詳しく教えて欲しい
- ・手術の方法、時間、手術後どんな経過をたどるのか
- ・病気は進行するのか、検査結果はすべて教えて欲しい
- ・わかりやすい説明が欲しい